

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 19 日現在

機関番号：30121

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884042

研究課題名(和文)日英バイリンガル児童・生徒の作文力の発達に関する縦断的研究

研究課題名(英文)A longitudinal study on the writing development of Japanese-English bilingual students

研究代表者

佐野 愛子(Sano, Aiko)

北海道文教大学・外国語学部・准教授

研究者番号：20738356

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：プレ・ライティングストラテジー(PWS)と作文力の分析から、バイリンガル児童・生徒の作文産出では、すべての言語資源を積極的に活用することを支援する教育方略の重要性、特に二言語両方で低迷している生徒に対する明示的なPWS指導の重要性、継承語学習者にとってPWSの指導の重要性に関わる教育的示唆を得た。また語彙の分析からは、バイリンガル児童の作文指導においては、単独の語彙指導だけではなく、まとまりを持った語彙の多様性を広げるような指導が有効であることが示された。さらに、保護者へのインタビューから、こうした高度なバイリテラシーの発達を支えた背景に家庭での積極的な支援があることも浮き彫りとなった。

研究成果の概要(英文)：Three pedagogical implications emerged out of analyses of pre-writing strategies (PWS) and the writing expertise of bilingual writers; 1) the importance of instructive strategies that cultivates the use of entire linguistic repertoire of bilingual students, 2) the importance of explicit teaching of PWS to those who have limited writing abilities in both of the languages, and 3) the heightened importance of teaching PWS for heritage language learners in particular. The importance of teaching for enhancing not only the varieties of single words but also the varieties of lexical bundles, or set of several words, in the teaching of bilingual writing was also pointed out in the analysis of the development of productive vocabularies. Finally, through the qualitative analysis of interviews that were conducted with the parents of these bilingual writers, it was revealed how conscious support from the parents at home benefits the biliteracy development of young bilingual students.

研究分野：バイリンガル教育

キーワード：バイリンガル教育 作文発達 継承語教育

1. 研究開始当初の背景

急速に国際化する世界経済を背景に国境を越えて移動する労働人口が急増し、それに伴って、母語環境から第二言語環境へと移動する学齢期の子どもたちも急増している。特にリテラシー能力を育成する重要な時期に第二言語環境に放り込まれる子どもたちに対してどのような教育的支援が必要であるかという問いは、今や世界のあらゆる国々において喫緊の課題であるといえる(Baker, 2011; 川上, 2006)。

こうした言語的・文化的に多様な背景をもつ児童・生徒(Culturally and Linguistically Diverse Students; 以下 CLD 児)に対する教育的支援はこれまで第二言語(L2)の習得という文脈で多くが語られてきた。その反面、第一言語(L1)とL2の言語能力は互いに支え合う、とする二言語相互依存仮説(Cummins, 1981)に代表されるような、バイリンガルの二言語両方の伸びを支える教育の有効性が示されるようになってきた。これは、CLD児がそもそも持っているL1の能力をL2習得の際のノイズとして捉える既存の枠組みから脱却して、むしろL2習得のツールとして活用するという視点からバイリンガル教育を捉えなおす試みであって、さらにimmersion教育やTwo-way Bilingual教育などの形で実践されているものである。こうした教育の有効性を検証し、さらに改善していくための研究が次第に注目度を高め、Teaching for transfer(Cummins, 2008)やTranslanguaging(Garcia and Wei, 2014)などの概念に結実してきているが、August & Shanahan(2008)の大規模な調査でも指摘されているように、特に作文力の発達に関してこのようなバイリンガル教育の視点から行われている研究は現状ではきわめて少ない。英語とスペイン語、英語とフランス語のように言語的にかなり近い言語の組み合わせでは研究の蓄積が見られるが、日本語と英語ほど言語距離が離れていてしかも表記体系が全く異なる言語の組み合わせにおいてはまだこうして研究はほとんど手付かずの状況であった。

こうした社会的情勢とそれにこたえるべき研究の少なさを踏まえて、これまでにカナダ在住の日英バイリンガル児童を対象にしたバイリテラシー発達に関わる研究を行ってきた。一連の研究の基盤となったのが、日本語作文に関する指導が英語作文に与える影響について研究したもので、これは修士論文としてトロント大学に提出したものである。さらにその後、平成21年度～23年度科学研究費補助基金基盤研究(B)(研究課題番号21320096 研究代表者 中島和子)の研究の一部として、カナダ在住の日英バイリンガル児童・生徒256名を対象にした日英作文力の発達とその二言語の関係性に関わる研究を行ってきた。これらの研究を踏まえ、発展させつつ、縦断的な性格を与えるために前中

島科研の参加者に追跡調査を試みようとしたのが本研究当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究はこれらの一連の研究を受けて、その分析をさらに深めるとともに、縦断的要素を取り入れて前研究の参加者に追加の調査を試みる目的で計画された。前中島科研で収集したデータの更なる分析については、特に日英二言語の作文におけるプレ・ライティングストラテジーのあり方と二言語の作文にいられる産出語彙の分析に焦点を当てた。縦断的な要素を加味する部分に関しては、以下の2つの研究課題を設定した。

- 1) 前研究に参加した日英バイリンガル児童・生徒の作文力は前回の調査時点に比べてどのような部分で伸びを見せ、また継承日本語のどのような側面において言語喪失が見られるのか。
- 2) 前回の調査において4つに分類された児童・生徒は今回もそのタイプに属しているのか。前回両言語高度発達型と分類された児童・生徒は今回もそのタイプに属しているのか。そうした言語発達を支える個人・環境要因とはどのようなものか。

3. 研究の方法

プレ・ライティング(PW)のあり方とそれが作文に与える影響について、前中島科研で得られたデータを再分析した。

まず、バイリンガルの児童・生徒に特有のストラテジーと考えられるTranslanguaging(TL)の出現について観察した。ここでは日本語作文のためのPWに英語を使用したもの、反対に英語作文のためのPWに日本語を使用したもの、さらにひとつのPWの中で二言語を自在に利用しているものを特定し分析した。

また、様々なPWがどのように作文に影響を与えているか、という課題については、観察によってPWのタイプを以下の5つに分類した。すなわち、PWなし、絵・図使用、下書き作成、リスト作成、及びクラスター作成、である。また、作文の構成に関してはMyhill(2009)に倣い、Textual:文章全体のまとまりを視野に入れて段落内、段落間のつながりにも配慮し、さらにPWを踏まえて導入とまとめの部分を加えてあるもの。

Topical:局所的な主題を中心に段落が形成され、文章全体の構成やまとまりが視野に入っていないもの。Graphic:段落意識が弱く、PWとの関係も希薄なものの3つに分類した。また、PWと産出された作文の関連性については、十分に計画を練ったPWが産出されこれを最大限に活用して作文したものの; Organisational Strategies(OS)、PWである程度構成についての視点を持っていることが認められつつ部分的にしか作文に反映されていないもの; Emergent

Organisational Strategies (EOS)、PW をほとんど作文に反映させていないまたは状況依存的に作文をしているもの； Pre-Organisational Strategies (POS) に分類し、これら 3 つの観点からその二言語の関係性を分析した。

また、作文力の発達のうち特に語彙の発達に関してはこれまでの研究の中でアカデミック語彙の使用に関わる二言語の関係性が明らかにされてきた(Sano et al., 2014) がこれをさらに発展させ、語彙のまとまりの出現頻度とその作文力との関係性を探るために lexical bundles に着目して分析を行った。より具体的には、全作文データのうち、3 つ以上のテキストに 2 度以上の頻度で出現する 4-gram の語彙について、作文の質的評価、産出量、及び使用された語彙の多様性という 3 つの作文力の指標との関連について分析した。

前中島科研で得られたデータの追跡調査に関わる部分については、当該補習授業校の在籍者の移動が想定以上に高かったこともあり、全校調査の実施はかなわなかったこと、また、個人的に作文を書いてもらうためには相当な時間の拘束が必要となるため参加者希望者が極めて少なかったこと、さらには、その実施には 1 週間の間隔をあけて二度のデータ収集が必要であることから、そうした小規模データの収集のために渡航費・滞在費を含む多額の調査費用をかけることが適切ではないと判断したことにより、作文データの再収集という形は見送った。その代替策として、前回の調査で日英二言語ともに高度な作文力の発達を見せていた参加者の保護者に合計 6 時間 5 分、平均 61 分間のインタビューを行い、その中で該当生徒の日英作文力の伸びを保護者の視点から判断してもらうとともにそれを支えてきた環境要因について調査した。このインタビュー調査の結果については SCAT 分析の手法(大谷, 2007)を用いて行った。SCAT(Steps for Coding and Theorization) とは、大谷(2007)によって確立された、小規模な質的データの分析において明示的かつ定式的な手続きを経て理論を記述するための手法である。具体的には、データをセグメント化しながら、1) データの中の着目すべき語句を抽出、2) それをデータ外の語句を用いて言い換える、3) それを説明するための語句を考える、4) それを説明するテーマ・構成概念をまとめる、という 4 つの段階においてコードを付していき、理論記述へと結び付けていく手法であって、近年様々な分野で質的データの分析に用いられているものである。

4. 研究成果

前中島科研で収集した 480 (日英それぞれ 240 ずつ) の作文データセットのうち、51 の作文の PW において TL が観察された。そのうち 12 件は日本語の作文のための PW で英

語を使用したもの(タイプ A)、24 件が英語作文のための PW で日本語を使用したもの(タイプ B)、14 件がひとつの PW の中で TL を行ったものであり(タイプ C)、残り 1 件が英語作文のための PW にフランス語を使用したものである。これらの PW についてさらに詳しくみたところ、タイプ A には日本語の運用能力の限界があるために英語を使用したものだけでなく一定程度日本語の運用能力はあるものの構造のしっかりとした PW を産出するためにより強い方の言語をあえて使用したものもいることが観察された。

同様に、タイプ B の中には英語の運用能力に限界があるために日本語を使用したもののほか、英語の運用能力が日本語のそれをしるぐレベルになりつつあるにもかかわらず思考を支えるためにより強い方の言語として日本語を使用したものもあった。バイリンガル特有のストラテジーとして非常に特徴的な対応の TL といえるタイプ C については、基本的に指定された言語で PW も産出しようとしたがところどころで強い方の言語を援用したもの、強い方の言語で先を考えてから指定された産出言語に翻訳したもの、利用可能な言語レパートリーを積極的に活用したものなどの多様な使用例が認められた(図 1 にその例を提示)。

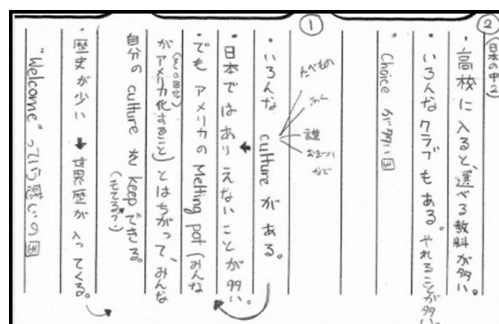


図 1: 言語レパートリーを積極的に活用した PW の例

これらの観察から、すべての言語資源を積極的に活用することを支援するための教育方略の重要性が示唆された(詳細は AAAL で口頭発表した)。

また、同データのうち、中学 1 年から 3 年の 48 名を対象に、産出された PW のタイプについて詳しく観察したところ、PW なし、絵・図使用、下書き作成、リスト作成、及び クラスター作成、という 5 つのタイプが見受けられた。この PW タイプの二言語での関係性を分析すると、48 のデータセットのうち 31 件において、日英で共通するタイプの PW を産出していた。さらに、PW と産出された作文の関連性を前述の OS, EOS, 及び POS に分類してその二言語の関係性を探ったところ、48 件中 28 件で日英に共通するストラテジーの使用が確認された。さらに、先行研究で特定されたバイリンガルタイプとこの PWS との関連を見ると、日英両言語ともに高度に発達しているグループでは OS (十分に計画を練った PW が産出され、これ

を最大限に活用して作文したもの)の使用頻度が最も高く、POS (PW をほとんど作文に反映させていないまたは状況依存的に作文をしているもの)またはPWの産出がなかったのは日英ともに低迷しているグループのみであったことから、特に二言語で低迷しておりかつPWSの発達が見られない生徒に対してはそのバイリテラシー発達を促すためにPWSに関する明示的な教育的介入が必要であることが示唆された(詳細はIAIMTEで口頭発表した)。

また、同データの小6~中3までの対象者のうち、「海外生まれ、もしくは5歳(生後60ヶ月内)に国を越えて移動、幼児期から英語と日本語に接触する環境で育つ日本人・日系人児童生徒」と定義する継承語学習者(Heritage Language Learners, 以下HLL)24名に焦点を当て、彼らの作文力の実態を明らかにし、基礎的な作文力だけではなく、年齢相応の文章を書く力(文章力)を英語と日本語の両言語で獲得するための対策と指導について示唆を得るためにそのPWSの本文の質への貢献度を分析した。本文の質については、前述のとおりMyhill(2009)に倣い、文章構成との関係でTextual, Topical, 及びGraphicの3つに分類した。その結果、両言語とも、Textual(文章全体のまとまりを視野に入れて段落内、段落間のつながりにも配慮し、さらにPWを踏まえて導入とまとめの部分を加えてあるもの)にはOS、Topical(局所的な主題を中心に段落が形成され、文章全体の構成やまとまりが視野に入っていないもの)にはEOS、Graphic(段落意識が弱く、PWとの関係も希薄なもの)にはPOSが多いことが明らかになった(図2)。

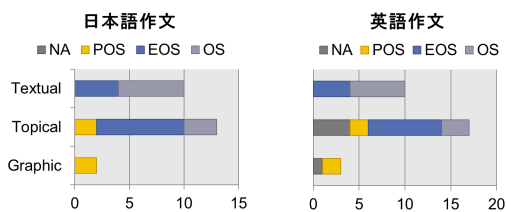


図2：日英の作文におけるテキストタイプ別のPWS

この調査によって、文法、漢字力、表記の正確度などが注目されることの多い一般的な作文評価においては過小評価されがちなHLLの作文力について、優れたPWSを持つものの強さが浮き彫りされると同時に、会話は流暢でも文章力の発達が遅れがちな非漢字環境で育つ継承語学習者にとって、PWS指導は極めて重要であり、カリキュラムの中にしっかり位置づけるべきものであることが再認識された(詳細は日本語教育学会で口頭発表した)。

加えて、バイリンガル児童・生徒の作文における語彙の発達とその二言語の関係性を分析するためにLexical bundles(高頻度で

出現する特定の数の単語のまとまり)とその二言語の関係性についての分析も行った。Lexical bundlesについては、第二言語学習者の作文において過剰な使用が認められたり、またその反対に使用が極めて限定的であったりすることが知られており、継承語学習及び第二言語学習の途上にあるバイリンガル児童の作文におけるこうしたlexical bundlesの使用を観察することは、彼らの作文力発達を支える教育に対し主に語彙指導の側面で示唆を与えることが期待されたためである。本研究では3つ以上の文章に2度以上出現する4-gramのlexical bundlesに着目して分析した。これらのlexical bundlesの出現頻度と先の研究で分析されている作文の質的評価(Sano et al., 2014)や産出された語数、及び使用された語彙の多様性といった作文力の指標との関連を分析した結果、統計的に有意ではないものの作文力が向上するにつれてLexical bundlesの使用は減少する傾向があることが認められた。ここからバイリンガル児童の作文指導においては、単独の語彙指導だけではなく、まとまりを持った語彙の指導、特に意識的にその多様性を広げようとする指導が有効であることが示唆された(詳細はSSLWで口頭発表した)。

さらに、前研究の参加者の追跡調査にあたる部分に関する保護者インタビューを前述のSCATの手法を用いて分析した。ここでは紙面の制限上、その結果のうち、特に特徴的なインタビュー結果について、SCAT分析の第4段階(テーマ・構成概念)で抽出されたコードとそれを踏まえたストーリーラインおよび理論記述を提示する。

SCAT 分析第 4 段階から抽出されたコード：

- 家庭内および就学前教育の場で強固で質の高い母語の基盤を確立
- 第二言語習得における本人の心理的抵抗感および成績不振
- 第二言語習得にはある程度時間がかかることに対する母親の理解
- 第二言語習得に関する母親自身の経験からくる不安感の少なさ
- 母語の力が第二言語に移行するという専門的な知識に支えられた不安のなさ
- バイリンガルの視点にたった日英の読み聞かせインプットに関する調節
- 強固なL1の上にL2を育てるという明確な見通しによる教育方針のぶれのなさ
- 母親自身の教師経験を活用した子供への学習支援
- 自分の親の子育てを反映した子育て
- 自分自身と娘のL2習得の比較分析から生まれた意識的にL2に触れさせなければならぬという判断
- 英語の方が読み書きが苦手であることに対する学習者自身の自覚とそれを克服したいという意識

自らの学習動機を維持しやすい教材の学習者による意識的な選択
 娘の L2 に関する心理的不安軽減に伴う家庭内での translanguaging の活用
 CF 習得後 ALP 習得に関わる壁についての母親自身の経験に基づいたアカデミック語彙の明示的学習への支援とその語彙習得および自信に関わる効果
 学習者自身のメタ認知とそれに基づく学習ストラテジー
 学習支援のツールの積極的活用推奨及び親の scaffolding の段階的かつ意識的削減・自立した書き手への橋渡し
 漢字力・語彙力・作文力の関係の認識英語の語彙使用に関する本人のリスクテークとそれに対する母親の指導
 学習者のニーズにあわせた支援の変化
 自分自身の経験に基づく子どもの教育への理解の深さ
 学校の課題による L2 インプット量の増加に伴う L2 の伸び・継承語の保持

① 継承語学習者としての経験に基づく親から子への押しつけの回避・進路実現の中で継承語教育の相対的価値づけ
 ② 継承語話者の共同体としてのクラス
 ③ 全日プログラムおよび CLIL 的言語習得を促進する教育プログラムの評価
 ④ 読書経験の共有の場・継承語学習者の共同体
 ⑤ 継承語の印刷物の提供場面としての補習校の役割・読書経験の共有者としての保護者の役割

これらのコードから描かれるストーリーライン：

この保護者は継承語学習者としての自分自身の経験と、修士課程で学んだバイリンガル教育に関する専門的な知識及び ESL の教師としての専門的経験を総合的に反映させて娘のバイリンガル習得を支えている。特に、L2 の習得には時間がかかることに関する理解、L2 学習及び継承語学習に関わる動機づけに関する理解、娘の言語習得の状況を綿密に把握したうえでの言語インプットの調節、アカデミックな言語習得のために必要な scaffolding についての理解などの項目にそうした自らの経験及び専門的な知識が反映されている。

また、学習者本人の自らの言語習得に関する認識とその弱点を克服したいという自覚的な取り組みも本人の高度バイリテラシー獲得に貢献している。

さらに、この保護者は、全日プログラムおよび CLIL 的語学習得を促進する補習授業校の教育プログラムを高く評価するとともに、継承語話者の共同体としての役割、読書経験の共有の場としての役割、及び継承語の印刷物の提供場面としての補習校の役割などに

高い評価を与えるなど、補習授業校を継承語保持のために最大限に活用してきた。

このストーリーラインから得られる理論記述

- バイリンガル教育に関する専門的な知識・理解はバイリテラシー発達を支える子育てに貢献し得る
- 継承語学習者としての保護者自身の経験は子どもの継承語学習にプラスの影響を与え得る
- ESL 教育に関する専門的な知識・経験は子育てにおける L2 習得支援に貢献し得る
- 学習者本人の弱い方の言語を意識的に伸ばそうとする態度は高度なバイリテラシー獲得にプラスの影響を与え得る
- 補習授業校を単なる継承語学習の場ととらえるのではなくその多様な役割について認識し活用することは高度バイリテラシー発達に有意義である

さらにこれ以外のインタビューの分析をも踏まえて総合的に分析した結果、前中島科研のデータ収集時より4年が経過した時点で、より英語の力が相対的に強まっている傾向があるものの必ずしも日本語の作文力の減退にはつながっていないという点を確認したうえで、こうした高度なバイリテラシーの発達を支えた背景としては、学習者自身の性格やコミュニケーション力および分析力といった資質とともに家庭での支援が極めて重要であることも浮き彫りとなった。特に、1) 保護者のバイリンガル発達に対する関心の高さ、及び専門的な知識や経験が家庭でのバイリテラシー保持に重要な役割を果たすこと、2) 継承語の保持の重要性を強く認識したうえで、日常の会話の中で意識的に熟語やことわざを使用したり、新聞を読む、ニュースにかかわる議論を行う、語彙力検定・漢字検定などの各種検定を利用したりしながら日常生活で多く使用される高頻度の語彙とは異なる語彙の習得を行うこと、3) 第二言語習得についても専門的な知識を保護者が意識的に求め、理解したうえで実用技能英語検定などを利用したアカデミック語彙習得に関する取り組みを意識的に行っていることなどがこれらの高度なバイリテラシー獲得を支えたことが明らかになった(研究のこの部分については現在論文を準備中)。

引用文献：

August, D. and Shanahan, T. (2008). *Developing reading and writing in second-language learners: Lessons from the report of the National Panel on language minority children and youth*. NY: Routledge.

Baker, C. (2001). *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*, 3rd edn. Multilingual Matters, Clevedon, England.

Cummins, J. (1981). The role of primary language development in promoting educational success for language minority students. In California State Department of Education (Ed.), *Schooling and language minority students. A theoretical framework*. Los Angeles, CA: Evaluation, Dissemination and Assessment Center, California State University, Los Angeles.

Cummins, J. (2008). Teaching for transfer: Challenging the two solitudes assumption in bilingual education. In Cummins, J. & N. Hornberger (eds.) *Encyclopaedia of language and education Vol. 5*, 65-75. NY: Springer Science and Business Media, LLC.

Garica, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Implications for language, bilingualism and education*. Basingstoke, England: Palgrave Pivot.

Myhill, D. (2009). Developmental trajectories in mastery of paragraphing: Towards a model of development. *Written Language and Literacy*, 12(1). 26-51.

Sano, A., Nakajima, K., Ikuta, Y., Nakano, Y., & Fukukawa, M. (2014). Writing abilities of Grade 1-9 Japanese-English bilinguals: Interdependency and AGE, AOA, and LOR. *Studies in Mother Tongue, Heritage Languages, and Bilingual Education*, 10. 60-90.

Sano, A., Thomson, H., Ikuta, Y., Nakajima, K., Nakano, T., and Fukukawa, M. (2014, August). "The cross-lingual relationship of pre-academic vocabulary in the writings of Japanese-English bilingual children". International Association of Applied Linguistics, Brisbane (Australia)における口頭発表

大谷(2007). 「4ステップコーディングによる質的分析手法 SCAT の提案 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」名古屋大学大学院教育科学発達科学研究紀要 第54巻第2号 pp.27-44.

川上(2006). 『「移動する子どもたち」と日本

語教育』明石書店

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

発表者: Sano, A., Nakajima, K., Ikuta, Y., Nakano, T., and Fukukawa, M.
発表表題: "Translanguaging as a pre-writing strategy: Its relevance to cross-lingual relationships and the biliteracy development among Japanese-English bilingual children".
学会名: American Association for Applied Linguistics
発表年月日: 2015年3月23日
発表場所: Toronto (Canada)

発表者: 中島和子・佐野愛子
発表表題: 「継承日本語学習者のプレ・ライティングストラテジー: 英語圏在住小・中学生のバイリンガル作文調査を踏まえて」
学会名: 日本語教育学会
発表年月日: 2015年5月31日
発表場所: 武蔵野大学有明キャンパス(東京都)

発表者: Sano, A., and Nakajima, K.
発表表題: "Pre-writing strategy bilingual writers employ: its cross-lingual relationships and the biliteracy development among Japanese-English bilingual students"
学会名: International Association for the Improvement of Mother Tongue Education
発表年月日: 2015年6月5日
発表場所: Odense (Denmark)

発表者: Thomson, H., and Sano, A.
発表表題: "Lexical bundles in the development of young bilingual (English and Japanese) writing"
学会名: Symposium on Second Language Writing
発表年月日: 2015年11月21日
発表場所: Auckland (New Zealand)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐野 愛子 (SANO, Aiko)

北海道文教大学・外国語学部国際言語学科・准教授

研究者番号: 20738356